ことを確く信じてゐるが、それまでにはなほ少時の困難を堪へねばならぬ。その間同學諸賢の高說勞作に啓發される機會は乏しくなるであらうが、著者のいよ〳〵精進加餐を願ひ、併せて同學諸賢の自重をも冀ふ次第である。（A5版、三八六頁、昭和十九年八月、岩波書店刊、價六・〇〇）（平山敏治郎）。

昭和十五・十六年度東洋史研究文獻類目

東方文化研究所編

この類目は昭和十年七月第一册を出した同研究所編の『東洋史研究文獻類目』の第六册に相當るもので、收むる所表記の二年間に於ける日本・支那・歐米に亙る關係文獻を類聚してゐる。從つてその體裁は既刊のものと大差ないのであるが、併し本册からは從來單に書評のみを載せたに過ぎない單行本をば新たに收錄して、通じての文獻目錄たるに至つたのは注記すべきであるし、なほまた卷首に同研究所員が分擔執筆した學界展望を載せたことも精粗必ずしも一でないが、一般利用者に便益を與へるものとして、編者のこの種類目の編纂に對する熱意がそれ等から充分に認められる次第である。

今度の戰の急迫化に伴うて、出版文獻の入手に困難を伴ひ、それは支那・歐米をも含めた本文獻類目に於いて殊に大きいことであらう。從つてうちに遺漏のあることは免れ得ないし、また印刷も容易でなく、引いて是等から本册の出版期日が遲延したと考へられるが、全般の研究を進める上に重要な役立ちをするこの事業、而も一面に於いて兎角型にはまり勝な面を持つ文獻類目の作製に於いて、本書の如く册を重ねて內容の充實に意を用ゐられてゐるのは我が東洋史界の爲に慶賀すべきである。公的な研究所の事業として今後もその續刊が當然期待せらる。本類目に先立つて公刊された筑波家國史研究部の年々の『國史學界』が同樣引續いて印行されてゐるのはよろこばしい事であるが、たゞ同書は當初の內容の整ふたに較べて、年々形式に墮して行つて、內容に遺漏の多いものとなる傾向の見受けられることや、前年來出版の文獻目錄の類がやゝもすれば糊と鋏で作られた機械的なものゝ多いのを思ふにつけ、本書は一つの籠を與へるものであり引いて改めて紹介することにした次第である。（B5版、二八〇頁、京都印書館發行、定價㊟拾圓）（梅原末治）。

南海に關する支那史料

石田幹之助著

近時一般東洋學の目覺ましき發達に伴ひ、南海史の研究も長足の進步を遂げ、その南海諸地域に政治的・經濟的・宗教的關係を有する歐米諸國學者の研究成績には見るべきものがある。我が國に於ても大正初年以降、故藤田豐八博士を始め、少數乍ら優れた學者により研究がものされ、夫々專門學術雜誌に揭載されたことは周知の通りである。併し乍ら元來この地域が東洋文化の中心地からかけ離れてゐる關係から、南海史については一般に關係が薄く、從つてその研究は東洋史の他の部分に比べて立遲れの狀態に